
転生、そして・・・

桐生 セイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生、そして……

【Nコード】

N2248Z

【作者名】

桐生 セイジ

【あらすじ】

ありがちでベタベタな転生物の習作的な何かです。

剣あり、魔法ありありがちな作品にしたいと思ってます。

処女作で拙い文章かとは思いますがお読みいただければ幸いです。

0・0 はじまり的な何か（前書き）

昔作ったゲーム用のプロットをそのまま焼きなおしてみた。類似してる作品が無いと良いなと願う次第。。。 （調べた限りは無かったが。。。）

0・0 はじまり的な何か

最初に虚無があつた

初めに神が生まれた

神は言われた「大地よあれ」

神は言われた「空よあれ」

神は言われた「海よあれ」

そして最後に神は言われた「時よあれ」

そして・・・時は動き出す

どうやら、この世界の神は怠惰だったようだ。

どうやら私は死んでしまったらしい。

らしいというのは、私には死んだ記憶がないからだ。
いや、記憶が無いという事は実は植物状態で死んではいないのかも

しない。

しかし、私がどういう状態なのかはどうでもいい話である。

問題なのは、私には名前をはじめとして”大半の”記憶がないことだ。

あれ？死んだら脳が働かないから記憶は無いのが普通なのか？

まあ、だからといって今のところ不都合がある訳ではない。

少なくとも私は動けないし、すぐに何等かの不都合は生じないだろう・・・

『眠い・・・』

そして、私はなぜか無性に眠くなってきた。

なんだ、これは？

選択肢？

『まあ・・・いいや・・・』

私の意識は深い眠りへと落ちていった。

0・0 はじまり的な何か（後書き）

実際、ここまでは独創性のかけらもないと思っている。
今後の展開に期待したい。。。。

0・1 独り言的な何か（前書き）

表現って難しい。。。。

0・1 独り言的な何か

私は暗い所でなにやら温かいものに包まれている。

まあ、それはどうでも良い事だったりするのでここでは置いておこう。

幸いな事に考える時間だけは沢山あるようなので、ここで少し私のいる世界について整理がてら説明しておこうと思う。

私の今居る世界は、この世界では神々の栄光の世界と呼ばれている。

簡単に言ってしまうえば異世界だ。

異世界と言っても、私が前に生きていた世界と根本的な物理法則などとは変わらないらしい。

幸いな事に、記憶喪失とはいえ学問的な事は覚えているのでこの世界でも何とかやっていけそうだ。

おっと、忘れてはいけないのがこの世界にはどうやら魔法があるらしい。

まあ、魔法の詳細についてはおいおいやっていく事にしよう。

ここで一番説明しなければいけないのは、なぜ私がここまで知っているかという点だと思う。

どうやら、この世界には、某ゲームのようにスキルのなものやパラメーター的なものがあり、私は先天的なスキルを幾つか保持してい

る。

現在持っているスキルで持っている事がわかるものは、
転生者の大半が持っている「記憶を受け継ぐ者」

思考能力を引き上げる「覚醒」

そして先天的に知識を持っている「賢者」

この3つだ。

やれやれ、覚醒があるとはいえ生まれる前の胎児にとってはかなりの負担に成ってるようだ。

今回はここらで寝るとする・・・か・・・

0・3 続独り言的な何か

やあ、久しぶりだね

私の方は相変わらずの状態だよ。

今回は、前回後回しにした魔法の話をしようか。

この世界の魔法はどうやら『世界を騙す』事により効果を発生させるらしい。

突然『世界を騙す』と言われてもわかりにくいよね？

人がそうだと信じ込めばそれが実現されると表現すればわかりやすいだろうか？

例をあげるならば・・・そうだな・・・一般人を宮廷魔法使いにしたら『宮廷魔法使いならば凄い魔法が使えるだろう』という期待があるから、『本人に魔法を使用するイメージがあれば』凄い魔法が使えるといった感じかな？

私もあくまで知識として知っているとただだから、上手い例えが出てこないなあ・・・

まあ、本人のイメージの強さ次第で魔法が使えるようになるから、あまり意味があるとは思えないけどね。

とりあえず、上手い例えは後日への課題という事にしようか。

さて、そろそろ時間のようだね。

私はそろそろ寝る事にするよ。

では、また会おう。

1時間後、とある辺境の町で1人の子供が生まれた。

その子供が今後どのように成長するのか、この時点では知る者はいない。。。。

1・0 誕生的な何か

やあ、また会ったね。

うん、まずは現状を説明しよう。

とりあえず、私は生まれた。

当然の如く0歳児として。

当然の事ながら、自分では動けないし、喋れない。

つまりは、何も出来ないに等しい訳だ。

当然の事ながら、見えるものは観察し、聞けるものは聞き情報収集はしている。

だが、所詮は0歳児の私の回りにあるものなどたかがしれている。

魔法を使って多少は感覚を強化してとはいえ、当面は出来る事は無さそうだな・・・

「・・・アダムは寝ているのかい？」

「さっき寝たばかりですわ」

おや・・・父が帰ってきたようだ。

せっかくだから両親について簡単に説明しよう。

父親は一応騎士らしい。

まあ、産まれたばかりの乳飲み子の前で、わざわざひけらかしたり
もしないだろう。

母親はこれといって仕事をしている訳では無いようだ。

私が産まれたから一時的に子育てに専念しているだけかもしれない
が・・・

まあ、美人ではある。

美人に母乳を飲ませて貰っている訳だからある意味ラッキーなのだ
ろう。

母親ではあるが・・・

さて、そろそろ疲れたから失礼するよ。

1 : 1 日常的な何か（前書き）

土日はおやすみね…

1・1 日常的な何か

やあ、元気だったかい？

さて、とりあえず前回より半年たった訳だが、ある程度わかった事を説明しようか。

今は帝国歴13年

つまり建国から13年しかたっていないらしい。

そして、魔法に関してわかった事は1度に1つしか使えないらしい。

と言いつつも私は「幻影」と「実体化」の魔法を常時起動しているから、恐らく一般魔法（一般的に使われる魔法だからこう呼ぶ事にした）で適応されるルールだろう。

ああ、あと父の名前がアーウィン・ロレンスで年齢が22歳、母がリデア・ロレンスで18歳らしい。

家があるのは帝都である。

とりあえずこんなものだれうか？

まあ、こんなもので今回は失礼するよ。

1 : 1 日常的な何か（後書き）

早く学園編まで入りたい…

1・2 発見的な何か

やあ、元気だったかい？

前回から3カ月ぶり、つまり私は7カ月になった訳だ。

そして、色々考えてて気づいたんだ。

私の日頃いる部屋には魔法を使った照明器具が設置されているが、それは入口付近のスイッチらしきものによって管理されているらしい。

まあ、それだけならどうという事は無いんだが、私は気付いたんだ。

どうやら、この世界の魔法には距離が関係ない。

それがどういう事かと言うと、私が生み出した魔法を使えば私はベツトに寝ながらにして『外の世界を旅出来る』という事だ。

つまり、私が遠隔で人の幻影を生み出し、それに実体として活動出来るものを付与する事で、平たく言えば幽体離脱したものに実体がある状態を生み出す事が出来るという事だ。

そして、魔法を使ってモンスターを倒せば経験値が手に入る・・・これは基本中の基本だ。

上手くいけばチート級の成長が出来るのではないだろうか？

これは試してみる事にしよう

1・3 はじまり？ 的な何か

やあ、久しぶりだね。

といつても前回からほとんど時間がたつてない訳だが・・・

とりあえず、試してみよう。

『幻影』・・・よし上手く発動したようだ。

ベッドの横にぼんやりとした白い固まりが見えている。

あー・・・どのような姿にするか指定しないとダメか。

とりあえず、私が成長して15歳になった位にしておこう。

そう決めた途端白い固まりは銀髪の美少女へと変わっていく。

ああ、説明してなかったかもしれないが、私は自分自身が産まれる前に自分を対象に『幻影』の魔法を掛けた上で『実体化』の魔法を掛けている。

つまり、私は本当は女なのだ。

まあ、ここではあまり関係無い話なので実験の方を進めよう。

次の段階として『実体化』を掛ける。

そして自分自身を抱き上げる。

成功だ

とりあえずベッドへと戻し魔法を解除する。

これで成長を待たなくても冒険が出来る。

あ、何か空間把握系の魔法を使わないと状況がわからないぞ・・・

『遠視』を使えば行けるか？

その辺は実地で試す事にしよう。

モンスターのドロップは、異次元にでも部屋を作って保管すれば良
いか。

使えば使っただけステータスは上がるようだし、がんばろう。

とりあえず、軽く探索に行く事にし、家の外に魔法をさせる。

『遠視』を幻影の目の部分を起点として発動する事で視野を確保し
て、帝都内を散策してみる事にする。

私が済む家は住宅地にあるらしく、周辺にはほとんど人がいない。

まあ、昼だしな・・・

とりあえず、賑やかな方に向かう事にしよう

1・3はじまり? 的な何か(後書き)

ちよつとは進んだかな・・・?

1・4 外出的な何か

私はにぎやかな方へ歩を進めた。

どうやら、家の前の通りは大通りに続いているらしい。

（ほう・・・結構広い通りだ。）

恐らく帝都でも大きい通りに入るのだろう、店が立ち並ぶ通りへ出た。

（あれは・・・武器屋か？こっちは宿屋っぽいな）

それぞれ建物の入り口に剣やベツトをあしらったエンブレムが掲げられている。

おそらくそれが各店が何を扱う店であることを示しているのだろう。

（しかし・・・いまの状態では行く必要もないか。）

そう、なにせ今の私はあくまでも魔法でそこにいるように見せかけ
ているだけであり、武器や防具は装備出来ないし、食事や睡眠も必
要ない状態なのだ。

（しかし、人が多いな・・・とひあえず外にでて魔法でも試すか。）

人が多いと魔法が見破られて面倒な事になるかもしれない、そう考
えとりあえず外に出ようとした。

が、しかし・・・

（門はどこだ・・・）

初めて外にでた私には門の位置などわかるはずがなかった。

（あそこで聞いてみるか）

私は目に付いた露店で聞いてみる事にした。

「あの、すみません」

「あいよ、お譲ちゃん何が欲しいんだい？」

「あ、いえ、買い物じゃなくて・・・ちょっと道をお聞きたいんですが。」

「なんだ、客じゃないのか。で、どこに行きたいんだい？」

「えっと、門の場所なんですけど・・・」

「へ？何を言い出すのかと思えば。門はこの道をまっすぐ行けばあるぜ。」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます。」

「なに、良いって事よ。機会があったらうちで買ってっておくれ」

結構気の良いおっさんである・・・頭が禿げあがり光を反射しているのを除けばであるが・・・

1・4 外出的な何か（後書き）

1 回の文章量を増やすと、書いたのを即投稿するのはどっちが良いんだろう・・・

即投稿の方がモチベーションを維持出来るかな？

1・5 捕獲的な何か

私は店の禿おやじに言われた通りを門を目指して歩き始めた。

そして私は見つけてしまった・・・

（猫耳・・・？）

そう、通りには亜人と思しき猫耳に猫尻尾の人々があるいて・・・いや、良く見れば尖った耳だったり、毛むくじゃらだったりする人（？）が思い思いに歩いている。

（流石異世界だなあ・・・）

などと思いながらも足は止めない。

そのまま歩く事20分ほど・・・

ようやく門が見えてきた。

（大きい・・・）

そう、門は幅10メートル高さ15メートルほどだろうか？典型的なアーチ型の門である。

まあ、門と言うからには当然見張りの兵士もいるわけだが・・・

（親父か・・・）

そう、門の横の詰め所の前に何やら兵士に指示を出している父親が居た。

ばれる事はないだろうとそのまま歩を進める。

門を出ようとした瞬間

「おい、そのちよつと待て」

父親に呼びとめられてしまった。

「ひゃ、ひゃい、なんでひょうか」

噛んだ・・・全力で噛んだ。

「ここで話すのもなんだからちよつと奥まで来てもらおうか」

「え？」

「良いから来い」

腕を掴まれ強引に詰め所の中に引つ張りこまれてしまう。

詰所の中は・・・まあ、男所帯ならではの乱雑さでごちゃごちゃした感じた。

「とりあえず、その辺の椅子にでも座れ」

父は扉を閉め扉が開かないようにであろうか扉に体重を預けている。

（この状態では逃げ出しようがないか。）

当然、魔法の解除をすれば逃げる事は出来るが、何が起きるのかに期待しつつ私は言われた通り椅子に座る事にした。

1・6 サブタイトルと内容の関連って無いよね的な何か

「さて、貴様は何者た？」

腕を組みつついきなり核心を問いかけられた。

「わざわざ、俺の家族の姿をして目の前に現れたのだから理由が無いなんて言ってくるなよ？」

（するどいな・・・）

「なぜ、気付いたんですか？」

「なぜ？おまえさんには生きている気配が全くないからな。気付かない方が難しいだろ」

「

「流石お父様ですね」

「は・・・えっ・・・お父様って・・・俺がか？」

「え？気付いたから呼び止めだんじゃ・・・」

「まさか、アダムなのか？」

「正確には使い魔みたいなものですが・・・」

「マジか・・・ちょっと待ってろ」

父はそう言つと慌てて外に出て何やら兵士と話している。

待つこと数分

「よし、帰るぞ」

「帰るってどこへ・・・」

「家に決まってるだろう。話しは帰ってからだ。」

こうして私の初めての冒険は1時間弱で幕を閉じたのである。

1・7 もうサブタイトルを付けないで数字だけで良いんじゃないかの何か

お気に入りか6件・・・

そなたに感謝を

1・7 もうサブタイトルを付けなくて数字だけで良いんじゃないかな何か

そうして、先ほどたどった道の利を父の後ろを付いていく事になったのだ。

歩く事30分ようやく家にたどり着く。

「ただいま」

父が扉を開けて入っていく・・・

（後ろについていけばいいのか？）

私はそのまま付いていく事にした。

「おかえりなさい・・・で、後ろに居るのはどちら様？」

出てきた母は険悪な空気を纏っている。

「えーっとだなあ、どう説明したらいいのか・・・」

「お父様とりあえず、奥の部屋へ」

「ああ、そうだな」

「お父様・・・」

母が凄い形相で睨んで・・・怖い怖い

「リデア、ほら、ちゃんと説明するからとりあえず奥の部屋へ」

父が無理やり母を押して私の寝ている部屋へと押しこんでいる。

さて、すんなりと納得してもらえるものかどうか・・・

「早く説明して頂けないかしら？」

かなりイライラしているのが声を聞いただけでわかる

「少し、落ち付けって・・・えっと説明して貰って良いかな？」

「はい、えーっと・・・簡単に言えば私は使い魔みたいなものです」

「使い魔・・・？」

母はよほど驚いたらしくポカーンと擬音が見えるかと思うほど驚いたようだ。

「はい、私はアダム・ロレンスによって具現化されています。」

「具現化？使い魔なら召喚じゃないのか？」

父にはある程度魔法に関する知識があるらしい。

「正確には、魔法によって生みだした幻影に対し実体化の魔法を掛けてるだけなので使い魔という表現は正しく無いですね。身代りと言った方が正確でしょうか？」

「なるほど、通りで生きている気配が無い訳か」

「気配・・・か、確かに生きてる訳じゃないからそれで見分けられるだろうが・・・この父親結構強そうだ。」

「逆に聞きたいんですが、なんで私を捕まえたんですか？」

「いやなに、リデアの若い頃に似ていて気配が無いからね・・・刺客かと思ったただだよ。」

刺客って・・・この親父は日頃何をしているんだろうか・・・

「つまり・・・貴方は私の娘という事で良いのかしら？」

母親は・・・話を理解してたのかわからん。

「良いんじゃないか？本人なら子守を任せても大丈夫だろう。」

うわ、子育てを丸投げしやがったよこの親父

「ふふふ、実は娘も欲しかったのよねー。それでお名前は？」

名前か・・・

「名前はー・・・ジョン・スミスとか？」

ジョン・スミスって・・・我ながら適當である。

駄目だこいつ早く何とかしないと、と思ったかはわからないが父も母も何やら頭痛に耐えているようだ・・・そりゃそうだな。

「仕方ないわね、貴方はアメリア・ロレンス私の遠縁という事にするわ。」

「それが一番だろうな。」

「それはそうとあなた、お仕事は？」

「いや、ほら・・・まあ、なんだアメリアを見つけて引っ張って・・・」

「お仕事は？」

「・・・行つてきます」

うちでは、父より母の方が強いらしい。

そうして、父はとぼとぼと再度仕事に向かったようだ。

「さて、アメリア歓迎の為に今日は御馳走を作りましょう。子守をよろしくね」

「はい、わかりました」

子守と言っても、自分の子守だからな。きっと大丈夫だと思いたい。

1・7 もうサブタイトルを付けなくて数字だけで良いんじゃないかの何か

あれ・・・土日は休みだったは・・・

1・8 土日はお休みです的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・8 土日はお休みです的な何か

流石に自分の子守はとても楽しかった。なにせ何をすれば良いかが全てわかる訳だからな。

そして、数時間が経ち夕方

「ただいま」

父が帰って来たようだ。

「おかえりなさい」「

風呂なんて洒落たものは無いから帰宅後そのまま夕食である。

「今日は奮発して御馳走にしてみましたー」

「おお、御馳走だ」

「え？」

私と父のリアクションには天と地ほどの差があった。

夕食は、黒パンに、具が沢山入ったスープ、それと少々のはムという構成である。

「ふふふ、凄い御馳走でしょ？」

「そう・・・ですね」

現代日本の感覚を持つ私には返す言葉も無い。さつさと食べてしまおうしよう。

そして、食後

「さて、今後の事についてだがアメリカはどうしたい？」

「えっと、冒険に出たいなと思ってます。魔法も使えますし・・・」

「うーん・・・なら学校に行ってみるのはどうだい？」

「学校？学校ってお金が掛るんじゃない？」

「一応、王立学園なら魔法が使えるればお金は掛らないみたいだし、受けるだけ受けて見たらどうだ？」

「あなた、その前に居住者として登録しないとイケないんじゃない？」

「ああ、そうかそうすると明日は居住者として登録してついでに学園に関しても調べてるか。それでいいか？」

「あ、はい・・・」

そうして夜は更けて行き、翌日に居住者登録（戸籍のようなもの）と学園の受験の手続きをする事になったのである。

1・9 多分分かれ道になる話しの前夜の何か（前書き）

そなたに感謝を

1・9 多分分かれ道になる話しの前夜の何か

そして、翌日である。

前日の夕食がいかに豪華だったのかがわかった。

朝食は黒パンと野菜スープ（塩未使用）だったのである。

まあ、いきなり聞くのも気が引けるから、他と比べてみてから聞く事にしよう。

特に問題も無く食事が終わり、予定通りに登録へ行く事になった。

「ちょちょつと名前を書くだけだから」

と言うのは父の表現であるが、登録自体は簡単らしい。

私は父に連れられて役所に向かう、その道中に父が役所について簡単な説明をしてくれた。

役所というのは複数のギルドや国の機関の窓口が集まった合同庁舎のようなものらしい。

ただし、冒険者ギルドだけは国際機関（？）で単独であるらしい。

そんな話を聞いてるうちに役所に着いたようだ。

役所の扉は開け放たれているためそのまま中に入っていく。

「居住者登録はここで良いのかい？」

「はい、居住者登録ですね？登録は・・・」

「登録はこいつで保証人は俺だ」

「それではこちらの用紙に必要な事項をご記入ください。それとカードの提示をお願いします。」

父が受付と話している間に私は用紙を記入することにした。

名前・・・アメリカ・ロレンス

年齢・・・15歳

性別・・・女

居住・・・保証人に同じ

こんなものだろう。

書いたものを父に渡すと保証人の欄に名前を書きそのまま窓口へ出す。

そして、待つこと数分

「お待たせしました、こちらが登録カードになります。内容を確認頂いて記載内容に間違いがなければ、捺印をお願いします。」

特に問題が無さそうなので捺印する。

簡単な説明を受けたが、どうやらこのカードは汎用で色々な機能があるとの事だ。

機能の追加は各ギルドで出来るから追加した時に詳細説明を聞けという事らしい。

「そういえば、学園の試験に関してはここで確認できるのか？」

「確認出来ますが、多分直接学園に行って確認した方が早いですよ。」

「やっぱりそうか・・・なら直接行く事にするよ。」

「あ、学園に行かれるなら紹介状をお書きしますね。」

そうして、紹介状を手に入れ王立学園へ向かうことになった。

1・9 多分分かれ道になる話の前夜の何か（後書き）

どのように進めるか悩む今日この頃

学者が冒険者、あるいは他の進路か・・・

1・10 2・0になんて為らない的な何か

王立学園では何事も無く受験要項を聞くことが出来た。

入学試験は小論文と魔法の実技によって行われるらしい。

まあ、勉強に関してはどうするかは今後の課題にしよう・・・と私は気付いてしまった

魔力が足りない

イメージが魔法であるというこの世界では魔力が足りないというのはおかしいと思うだろう。

通常の魔法はよくわからない何かを消費して魔法を発動するという『一般的なイメージ』の元に構成されている。

そして、この世界では訳のわからない何かが魔力として定義されている。

一般的なイメージがあるというのは例えるならば道を歩くようなもので、何も無い状態の荒野をあるく（自力で魔法を起動する）よりは圧倒的に楽なのだ。

そして私も面倒だから一般的な魔法を使い『今の体』を構成している。

一般的な法則に従って構成している以上、魔力が無くなれば他から持ってくるか一旦解除して回復を待たねばならないのだ。

）どうしようか・・・）

私は『とりあえず』空間に漂う魔力を吸収する事にし、問題を先伸ばしすることにした。

1・i 0 2・o になんて為らない的な何か（後書き）

とりあえずこれで・・・orz

1・11 そうだ樹海へ行こう的な何か。

「・・・という事で俺は仕事に行くから」

「え？」

のこり魔力の事を気にしていてどうやら父が話していたのを聞き逃したらしい。

「ほら、俺は仕事に行かなきゃいけないからアメリカはどうする？
って話だよ」

「えーっと・・・私はちょっと散歩でもして帰ります」

魔力が満ちてる場所を探さないといけないからね。

「そうか、じゃあ夕飯までには帰るんだぞ」

父はそう言つと中央に向けて歩いて行ってしまった。

それで良いんだろうか・・・？

まあ、考えても仕方ないしとりあえず、街の外に出る事にしよう。

昨日とは違いすんなりと外に出る事が出来た。

まあ、父が居ないなら当然か。

とりあえず・・・冒険者でも捕まえてこの辺の地理を聞くか？

ああ、そんな事する前に魔法で周辺のマップが見れるんじゃないかな？

試してみるか・・・『周辺探索』

おお、見れる、見れるぞ！縮小縮小と・・・

どうやら東の方が魔力が濃そうだな行ってみよう。

『飛行』

まあ、飛べばすぐに着くでしょう

飛んで行ったらそこは火山でした。

火山の麓に小さな都市があったのでとりあえずそこに行つて情報収集をしよう。

街の手前で飛行を解除し歩いて向かう。

帝都の外郭都市であるからか城壁と城門はそれなりに立派だった。有事の時は最終防衛ラインになるのだろうから当然といえば当然の

事であるが。

情報収集は・・・まず冒険者ギルドへ行こう！

そして探す事十数分意外と簡単に見つける事が出来た。

そういえば、帝都では冒険者ギルドに行かなかったから初の冒険者ギルド行きという事になる。

1・11 そうだ樹海へ行くところな何か。(後書き)

展開が無茶苦茶になりつつある今日この頃

1・12 早くもネタ切れのな何か（前書き）

そなたに感謝を

1・12 早くもネタ切れの何か

ときどきわくわくしながら扉を開くとそこは……

ただの受付だった

イメージ的には銀行を木造で作った感じだろうか？

入ってすぐの所に受付があり、恐らくこの受付で各窓口に振り分けていくのだろう。

窓口にはそれぞれ衝立のようなものがあり、一応プライバシー（？）が保たれてるという所だろうか？

とりあえず受付に行ってみよう。

「本日はどういった御用件でしょうか？」

「登録したいんですが」

「えーっと……そうですね3番窓口へどうぞ」

3番窓口ね……

「新規登録ですね？居住証明はお持ちでしょうか？」

「あ、はい」

今日取ったばかりの証明書を渡す。

「では、登録の説明をさせていただきます」

まあ、面倒なので要約しよう。

冒険者登録は2種類あるらしい。

具体的には本格的に冒険者をやる人向けの1種と、副業として冒険者をやる2種で、1種は各種特典を受けられるがノルマが決められているが、2種はノルマが無い代わりに特典が無いらしい。

という事で私はとりあえず2種にすることにした。

「では、登録しますので少々おまち下さい。その間にこの書類をお読みになってサインをお願いします。あと、こちらのギルドの制度に関しての冊子をお渡ししますので目を通しておいて下さい。」

と、書類を渡される

内容は・・・よくありがちな問題があったら自己責任で解決すること云々・・・とりあえずサインしました。

そして冊子の方を読むと、仕事の斡旋とランクに関して主に書いてあり、おまけ程度に本部支部の扱いなどが書いてあるだけのようだ。

こちらも要約すると、仕事は各内容毎にポイントが振られており、ポイントの多さがギルドに対する貢献度を表す（これは主に1種のノルマに関連するものらしい）また、それとは別に各人の能力に対してのランク付けがされており、このランクによって受けられる仕

事の難易度が変わるようだ。

「それでは、登録の方が終わりましたので居住者証明の方をお返します。アメリカさんの前途に幸がおおからん事を・・・」

さて、登録も終わったようだし、張り切って魔力の回収に行きますか！

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か (前書き)

そなたに感謝を

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か

ギルドに登録出来たので予定通り魔力の強い所へ行ってみよう。

確か山の辺りが濃かったから山へ向かってみよう。

山のふもとに辿り着くと洞窟と小屋があった。

そして道中結構な冒険者らしき人とすれ違う・・・ここに何かあるのだろうか？

とりあえず、小屋の前に立ってる人に聞いてみるか

「あの、すみません。」

「どうしたお譲ちゃん道にでも迷ったのか？ミマイズの街ならここから南東の方に・・・」

「いえ、そうじゃなくて」

「なら帝都かい？帝都ならここから東」

「そうじゃなくて、ここは何なんですか？」

「なんなんですか・・・ああ、ここはダンジョンだ」

「ダンジョン？」

「ああ、迷宮という呼ばれ方もするがな、一応ここはドラゴンが守護するダンジョンって事で有名だ。まあ、ドラゴンと言っても意志疎通が出来るからそれほど危険な存在じゃないがな」

意思疎通？会話でも出来るんだろうか？でもそもそも・・・

「ドラゴンって・・・」

「ん？ドラゴンを見たいのかい？」

「どちらかと言えば・・・見たいですけど・・・」

「そうかそうか、ちょっと待ってな」

と言って何やら小屋の中に入っていく男

待つ事数分

「待たせたな、じゃあちよっくら見に行こうか」

・・・仕方ないついていく事にしよう

移動中に男が簡単にドラゴンについて説明してくれた

ありきたりではあるが、地上最強の生物であるという事しかわからない

あと珍しかったのは移動中にモンスターが出現した時である。

「おっと」

男が急に立ち止まる

目の前には狼のようなモンスターが2体

「譲ちゃんちよつと下がってな」

私の前に目隠しをするように立ち何やら呪文を唱えている・・・すると

狼のようなモンスターが光を放ち消えてしまった。

「え？いま何が・・・」

「なに、邪魔だったからちよつと隣の通路に飛ばしてやっただけさ」

どうやら、強制的に移転させたらしい・・・もしかしてこれは色々
と使えるんじゃないだろうか？暇がある時にでも研究してみようと思っただけで終わった。

それ以外は特に何事も無く進み大きな扉の前へ辿り着いた。

1・13 結構無茶な展開だと思いつつ無理矢理書いた的な何か (後書き)

アイディアはあるんです。ただ文章に出来ないだけなんです

1・14 迷走し過ぎ的な何か（前書き）

そなたに感謝を

1・14 迷走し過ぎ的な何か

扉を開けて入るとそこは火口だった

ダンジョンと言われた洞窟をまっすぐ来ただけなのに火口だった

まあ、それは重要な事ではないのでおいておこう

活火山である事を示すかのように広がった溶岩湖の中にぽつんと頭を出した巨大な岩の上にそれはいた・・・ドラゴンである。

男の説明によるとこのドラゴンはこのダンジョンの主らしい

たしか、このドラゴンは意思疎通が出来ると言っていた気がするが・・・まあ、とりあえずはどうでも良い事である。

この場所は魔力がとても濃いいから魔力の補充をするのはここが最適だろう。

男に見つからないように、転移用の目印を付ける・・・なんかドラゴンがこっちを見てる気がするがキニシナイキニシナイ

とりあえず男に付き添われダンジョンの外まで出る

「おじさんありがとう」

「おじさ・・・」

あ、なんか落ち込んでる

「まあ、いい。気おつけて帰れよ」

よし、家に帰ろう・・・あ、その前に帝都の冒険者ギルドを覗いてみようかな？

そして、私は自宅へと転移する事にした・・・え？目印がないって？ほら、自宅には本体（？）があるから大丈夫なんだよ

そうして、自宅に帰ってみたらまだ早い時間だったみたいで、私は散歩がてら冒険者ギルドに行ってみる事にした。

そして道中特に何もなく（いや、何かあるのが問題であって普通は何もないからね）無事に到着中に入ってみる。

やっぱり、外郭都市と違って規模は大きかったが特に目新しいものは・・・あった、なんか壁際に機械が並んでいる。

どこかに説明書きが・・・なるほど、自動売買機か

一部の大量かつ簡単に手に入る素材系はこの機械で扱っているらしい特に機械に用事は無いので依頼の張り出してある掲示板を見る・・・やっぱり素材収集の依頼は多いな。

とりあえず、それだけを確認し今日は家に帰る事にした。

1・14 迷走し過ぎ的な何か（後書き）

裏設定¹

何かの魔法に移転の魔法を掛けると魔力を心太のように押しだして
いく為消費魔力は少なくて済む

どうかけば良いのかを悩む今日この頃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248z/>

転生、そして・・・

2011年12月27日22時52分発行